談話室

新しい機械工学便覧の物語

——その企画から誕生まで——

A Story about the Newly Published
JSME Mechanical Engineers' Handbook
— From Its Planning to Birth —

甲 藤 好 郎*
Yoshiro KATTO

Key Words: Handbook, Mechanical Engineering, History

1. はしがき

昭和9年(1934年)は、わが国で小形自動車の量産が始まったりした年であるが、その2月に誕生した本会の機械工学便覧は、以来50年の長きにわたり計5回の改訂拡充を経ながら最近の改訂第6版に至るまで、工学、工業の発展のために大きな貢献を続けてきた。また、このようにすぐれた便覧を持っていること自体、本会会員にとって大きな誇りでもあった。

考えてみるのに、1世紀ほど前、世界に向かって国を開いたわが国であるが、昭和10年ごろから理学、工学、工業の各分野で自主的な活動が顕著になり始め、以来、現在の高水準まで継続的に上昇発展の道を歩んできている。そして前述の機械工学便覧も、ちょうどこの時代を生きてきており、その間の本会の発展の象徴でもあったと言えることができる。

しかし今や、少なくとも工学、工業の面では先進国の地位を占めるに至った日本にとって、これからの将来は、真の創造と国際協力を基調にした新時代になるはずである。しかも時を同じくして、先進世界の中に、新しい技術体系の生成と産業構造の変化が急速に進み始めている。当然、日本機械学会の進路も、この新しい展望のもと、新しい発展のための新軌道に移行してゆくことになるであろう。そして、その先導とは言えないまでも、本年(1984年)6月、新しく生まれ変わった機械工学便覧の発行を見るに至ったことは、本会の保有する力強い活力を示しているような気がしてならないのである。

2. 新便覧誕生の物語

ところで、上記のような新便覧の構想が、本会内で立てられるようになったのは昭和47年ごろ、まだ本会の事務局が赤坂の日本規格協会ビル内にあったところのことである。そして昭和49年5月、事務局が現在の地に移った後、新便覧の検討分科会、編修分科会、

出版分科会の3分科会(注1)が次々に設置される運びとなり、以来、非常に多くの人々の努力の結晶として新便覧の誕生に至るわけである。また、その経緯については、新便覧巻頭の序文(前に検討分科会主査で、かつ現会長の石原智男君執筆)および経過報告(現在、出版分科会主査で、かつ第58期会長の藤井澄二君執筆)にくわしく記されている。

従って基本的な事柄については、これ以上、何も付け加える必要はないのであるが、最近、学会から、これまで表面に出たことのなかったことなども含めて、新便覧誕生までの話を会誌に書くようにとの依頼があった。しかも急ぐという。初期のころから新便覧に長く関係していた者の一人としての名指しであろうが、筆者はその任にあらず、また多忙でもある。固辞しかけたが、言われてみると、会員諸兄に新便覧への関心を持っていただくためにも、だれかが会誌に何かを書く必要があるようにも思われる。そんな気持ちで書棚を見てみると、関連資料ファイルが20冊ほど散らばっており、なお重要会議の録音カセットテープが6巻ほど——とりあえず中からキーポイントになりそうな重要資料を集め、年代表とともに1冊にまとめてみたら厚さ2.5cmほどにはなった。

そこで、この資料集をひもときながら、かつ前述の石原、藤井両先生から、それぞれの分科会運営上、気を付けられたことなどをうかがい、また編修、出版の各分科会で苦勞の多い面倒な仕事を分担された小委員会の主査の方々(注2)、および学会事務局から留意事項や思い出などを聞かせていただき、せん越ながら全体をまとめて以下の一文を草することとした。

ただ足掛け13年にもわたる長い期間のことである。筆者の知らないことも多々あるはずで、たとえば途中、検討分科会の審議に筆者は直接タッチをしていな

(注1) 正式名称はそれぞれ、機械工学便覧(新形式)検討分科会、新形式機械工学便覧編修分科会、新版機械工学便覧出版分科会。

(注2) 青木 弘、井田富夫、池辺 洋、植田辰洋、岡村弘之、片山功蔵、佐藤寿芳、塩崎 進、田島清瀨、棚沢一郎、土屋喜一、寺野寿郎、平田 賢、福島貞夫、古浜庄一、北郷 薫の諸君である。

* 正員、東京大学工学部(〒113 東京都文京区本郷7-3-1)。

い(注3)。それに紙数の関係から、氷山の一角ほどのことしか書く余裕がない。だから本稿は、表立った記録としてではなく、一つの気楽な物語として読んでいただくことを最初にお願ひしておきたい。

3. 新便覧の夜明け

さて昭和46, 7年, それは沖縄の返還, 高松塚古墳の壁画発見などのあったころのことであるが, この両年度, 本会の第三出版部会(出版事業部会の前身)の部会長は一色尚次君であった。そして当時, 改訂第5版として出ていた便覧が, 発行開始以来, もう相当期間がたっていたので, 上記の第三出版部会では昭和47年度から, その改訂に関する実質的検討に入った。このころ, たまたま筆者は編修理事で第三出版部会担当でもあったため, 同部会の会合に出席して話を聞く機会にめぐまれることになったが, 昭和47年度第1回会合(5月12日)は非常に印象的であったことを覚えている。

そこでは, 新情報や新分野が増大を続ける時代の機械工学便覧はどうあるべきかの議論があつて, 出席各委員(注4)からそれぞれ自由な意見が開陳された。便覧を見直して基礎便覧(学生用)と応用便覧に分ける案, 現行便覧の各分冊を独立させ, 別個にふくらませてゆく案, 紙数制限による説明内容の圧縮は理解困難をきたすだけだから, いっそのこと文献や書物を索引で示すだけの内容の便覧にしてしまう案, 専門的なハンドブックが出版されている分野はそれらにまかせ新情報を中心に便覧を作る案など, いろいろ話に出た具体案だけでも傾聴に値するものが少なくなかった。そして, それらを聞きながら筆者は, 便覧の全面的見直しの時期が来かかっていること, また見直すからには十分慎重な検討と方向づけが必要なことなどをひそかに感じさせられた思い出がある。

その後, 第三出版部会から, 便覧改訂に関するアンケート調査が, 企画部会所属の委員会, 研究会, 分科会を中心におこなわれ, (i) 全面改訂と部分改訂のどちらが是か非か, (ii) 現行の合本を幾つかに分割することの可否, (iii) 現行便覧のなかで削除, 改訂, 充実, 新設すべき項目などが問われた。しかし集まった回答には, きわめて現状維持の線が強く, そんなことから第三出版部会は, 便覧の刷新を期待しながらも, 従来の部分改訂によると言つた, やや入組んだ方針を理事会に上申, これを受けて理事会(昭和48年2月)で決定された改訂方針の内容は, 改訂第6版の便覧巻頭に掲げられた経過報告にあるとおりである。ただ面白いのは理事会決定原文に, “編・章などの大幅な変更は特定のものを除いておこなわない(いちおう, 特に新規な項目などについては将来新しい形式の

便覧の発行などで考える予定とする)”とある箇所で, この()内の部分だけは上記の経過報告に出ていない。未確定なことという理由で, 報告から省かれたものであろう。しかし, この省略された部分こそ, 当時の理事会の姿勢を示唆している点で, 歴史的に興味あるところのものである。

ともあれ, こうした経緯を経て昭和48年度の初めから, 前会長・竹中規雄君を主査として機械工学便覧第6版改訂分科会が発足, その編修出版の仕事がちゃくちゃくと進められていった(そして昭和50年9月に至って改訂第6版の最初の分冊発行の運びとなる)。一方, 思いもかけず筆者は一色先生のあとを次いで, 昭和48, 9年の両年度, 第三出版部会長に任命された。そして初年度前半は, 第三出版部会の運営内規の検討などに精力をとられたが, この問題は出版に関する点で理事会の権限とも関係を持ち, それで編修理事の石原智男君, 西川兼康君と準定期的な会合を持っていた。そしてそのおかげで, 理事会の動向も多少理解しながら, 第三出版部会において新形式の便覧の検討(昭和48年10月開始)を始めることができたように思う。

ただ一口に新形式と言っても, 当時は全く白紙の状態である。その状態から出発して新しい便覧のイメージを現実を作りあげてゆくことは容易な仕事ではない。下手をすると, 各種のイメージが競合分散して収拾がつかなくなる。そこで最初は新便覧の基本哲学, 一般方針など大綱の検討をおこない, それが確定できるか否かが問題である。もし確定できるようであれば, それに沿ってしだいに具体化の道を歩むことができるからである。第三出版部会では, そのような考えのもとに部会委員(注5)の意見をまとめ, 昭和49年2月, 機械工学便覧(新形式)検討分科会の設置上申書が作成されるに至った。

4. 新便覧の基本的あり方の検討

前述の検討分科会の設置は, 昭和49年度の理事会で承認され, 主査には石原智男君が選ばれたが, 多くの可能性を秘めた白い処女地に, 新便覧の基本ラインを一つだけ選んで引くという仕事は, 新便覧誕生までの仕事の中で質的に最も難しい仕事だったと言えるのではなからうか。また, それだけに, 分科会の構成や運営基本方針をどうするかは慎重な配慮を要することであつたに違いない。実際, 石原先生は構想をかためるため若干の期間を使われ, その後に分科会を出発させておられるようである。

そしてその際, 特に留意されたことが二つあった。その第一は, 新便覧の検討を開始後, 実際の便覧刊行まで10年ほどの歳月は要するであろう。従つて, 今から10年ほどの将来になって, それぞれの専門分野で現役として活躍, かつ指導的な仕事をしていると予

(注3) ただし同分科会の幹事・棚沢一郎君から, その全議事録を見せていただくことができた。このことを記して謝意を表する。

(注4) 一色尚次(部会長), 塚原茂司(幹事), 井沢 実, 大橋秀雄, 大山忠夫, 小樋一郎, 小茂鳥和生, 田中宗信, 土屋喜一, 中島静一の諸君が出席していた。

(注5) 秋山 守(幹事), 卜部舜一, 大橋秀雄, 下郷太郎, 武山斌郎, 土屋喜一, 中沢 一, 長谷川 宏, 浜本一郎, 宮川松男, 森 美郎の諸君であった。

想されるような人々、つまり年齢で言えば中堅ないし少し若い人々を中心に、なお大学、官庁、産業界などのバランスをとって分科会を構成(注6)、その新鮮な感覚と将来展望とから新便覧のあるべき姿を探ること。

第二には、一般に大きな改革の場合、その基本とすべきフィロソフィが最初に確立されていることが必要である。そこでこの趣旨に沿いつつ、哲学論争から出発し、理学と工学、工学と技術、また機械工学の概念など基本となる事項のフィロソフィを十分に検討、明確にした上で、新便覧のあるべき姿を求めてゆく。

それにしても、こうした主査の基本方針に対して、各委員が良くこたえて格調の高い調査や審議を進めていることも注目されるところである。筆者の私見になるが、機械技術者は、とかく目先の技術論だけに走りやすく、哲学的思索や将来展望などに弱い面がないとは言えない。その意味で、この検討分科会の仕事は異色なものであったと思うのだが、その結果、機械工学の発展と便覧のあり方、便覧に収納すべき機械工学の幅と深さ、また改訂期間と便覧内容との関係など、いろいろの問題が互いに有機的関連下に考察された。

そして、これら基礎論の上に立って、新便覧の基本形態が提案された。すなわち便覧をA編(「学問的な基礎」と言うべきもの)、B編(「応用の基礎および応用」と言うべきもの)、C編(各種の総合機械)、D編(数学、電気・電子、物性値など)に分割する方式である。ここにA編は、基礎的なものの集合なので、比較的長期にわたり改訂せずにゆけるであろう。一方B編のほうは、応用的なものに関係するから、技術の進歩発展などのため、もう少し短期の改訂が必要となろう。またC編は、交通、運搬、産業機械など、機械工学の集積からなる各種総合機械で、原則として各分野ごとに単行本(便覧的体裁を整えて)の形で発行、なお他の専門学協会から出版された便覧のあるものについては本会便覧から省略することとする。最後にD編は、機械工学以外の基礎的事項で、これも問題ごとに単行本形式の発行が考えられるものである。

さて検討分科会は、こうして答申原案を作成、それを第三出版部会(主査:佐藤 豪君)の会合で説明、大筋の了承を得た後、支部長、評議員、企画部会委員長、その他、各方面に対し賛否のアンケートをおこなっている。その結果は、回答者67名のうち、賛成が59名(88%)、条件付賛成は8名(12%)、不賛成0名で、このように非常に高率の賛成を得たことは、上記答申原案の優秀さを物語っている。そして昭和52年1月、検討分科会の答申書は提出され、これを受けた理事会はすでに期末であったため、本答申の趣旨に沿いつつ新便覧の目次案を考える編修分科会を設置するというだけを決定、その具体化を次期理事会に引き継いだのである。

5. 編修分科会の設立へ

昭和52年度の理事会には、たまたま石原智男君が庶務理事、筆者も編修理事となっていて、前述の編修分科会設置具体化の議論に加わるようになった。また副会長の会田俊夫君、庶務理事の生井武文君なども、よくリードされた思い出がある。ただそれにしても、いよいよ具体的な目次案の作成にとりかかるともなれば、A～D全編に対し少なくとも20個ほどの専門分野別の小委員会(その委員数も仮に各小委員会6名として総計120名)が必要である。そして、これら互いに半独立的な小委員会が集まって、限られた期間内に、機械工学の総合便覧として整合性ある目次案を作りあげるということは、必ずしも簡単ではない。従って、この段階で編修分科会に対して、便覧の全目次案の作成を一挙に依頼してしまっても大丈夫であろうか。それに検討分科会が提出している新便覧に関する基本構想を、現実の各種条件(総ページ数の制限、学会会計の問題など)のもとに具体化するにあたっては、その方法原理を事前に策定しておく必要はないだろうか。

いささか考えすぎの感もないではないが、実際に具体化への岐路に立つとなるとスムーズな展開が望まれる。しかも本会出版事業の柱とも言うべき便覧に関することである。結局、決断がついて、編修分科会に依頼する事項が理事会で決定されたのは昭和52年9月であった。そして出版事業部会(主査:中沢 一君)に対し上記分科会の設置要請がおこなわれ、その結果、藤井澄二君を主査とする編修分科会が昭和52年10月に正式に設立され、同主査の人選(注7)された21名の分科会委員候補者が出版事業部会によって理事会へ上申されたのが昭和52年11月29日であった。

しかし事態は、その後、思いがけない方向へ動いてゆくのである。まず、当時すでに年末で本会の評議員選挙が始まっており、それに続く会長選挙の結果が確定する2月の初めごろまで、前記の分科会の発足を少し待っていたほうが良いという情勢がみられた。そこで、しばらく保留状態が続いていたところ、今度は1月26日、東京大学工学部の教授会で藤井先生が学部長に選出されることになり、先生は新便覧の手間のかかる仕事が片手間となることを懸念され、理事会はこれを了承、つまり上記の編修分科会の発足は幻に帰することになったのである。

6. 新便覧の具体的骨組の編修

次期、昭和53年度の会長(白倉昌明君)名で、編修分科会の主査就任の依頼状が筆者に届いたのは6月である。そのくわしい経緯は知らない。筆者は自信があるわけではなく、できることなら辞退したかった。し

(注6) 石原智男(主査)、棚沢一郎(幹事)、安藤耕太郎、井口雅一、佐野川好母、清水眞佐男、竹中利夫、竹中康雄、玉野敏雄、富田久雄、仲田哲郎、油井兄朝、森美郎の諸君である。

(注7) このとき前検討分科会の主査と幹事(石原智男君と棚沢一郎君)、および在京の編修理事2名(本田富士男君と筆者)を集めて相談され、慎重を期しておられる。

かし学会からの要請には特殊事情のない限り応ずべきだという本会の慣習に加え、上記の依頼状の末尾には、冗談かも知れないが“理事一同の願望”という一句が添えてあった。

とまれ、そんなことから編修分科会は7月に設置されることとなり、9月開催の第1回会合から動き出した。この分科会は、個々の専門分野を担当する人々と、全体的立場からの検討を担当する人々(注8)に分けることを予想して構成された(二、三の重複はあるが)。また検討分科会からの答申(および添付アンケート意見)を集約して決めた基本方針を中心に、目次案編修作業の手引き書が作られたが、これらはすべて、前に機械用語(日本機械学会編)制定という複雑な作業をおこなった時に考えた方法の準用である。

それにしても本分科会では、(i) 今後、長期にわたり使用に耐えるような便覧骨組を考えること、(ii) 多数の専門分野が協力して統一ある目次案(編、章、節、項まで)を作りあげること、(iii) 当然最初はすべてが流動的な状態にあるものを忍耐強く再編を繰返しながら固めてゆくこと、(iv) 総ページ数と、その割振りなど各種重要事項を決定してゆくことなど、苦勞な問題が少なくなかったように思う。しかし、そういう問題もすべて、分科会委員、および所属小委員会委員の献身的な努力によって次々に克服されていった。分科会の会合にしても、常に建設的な形で意見が出され、熱気に満ちた雰囲気にあったように思う。そしてそうなったのも、たとえば比較的地味な分野ですら、その分野の進歩を含めて新しい息吹を持ちこむ努力をすとか、便覧のあり方や枠組に強く縛られる中でも、できる限り使用者の便利のように内容を工夫すとか、各委員の大きな熱意に支えられていたからである。なお委員の中には、検討分科会の答申に記されていた“機械工学の概念”が印象的だったと追憶される人もいる。

ともあれ個々の専門小委員会の作業と、全体を見渡す小委員会の作業とが何回か繰返され、その結果、昭和55年5月には編、章、節、項にわたる目次案(ページ数割振りを含む)の印刷を含んで答申原案ができあがった。ただここでC編については、B編との関連問題もあるのでB編の発行完了後に考えたほうがよいとの意見から、将来の検討にゆだねられている。またD編に関しては、便覧としての便利さの点から、単位、数学、電気・電子などで基礎的な事項はA編に収容(メカトロニクス時代も想定)、また物性値も各編で必要なものがそれぞれに収容される一方、独立形の数学編がD編の目次案として作成された。

この答申案に関し、特別員(企業)、支部長、評議員、企画部会をはじめ多方面に賛否のアンケート調査がおこなわれた。その結果、回答数102件のうち、賛

成78件(76%)、条件付賛成23件(23%)、不賛成1件(これは軸受関係の企業からでA、B編の区分が必ずしも利用者に便利でないという理由)であったが、ここで条件付賛成23件に付された条件は、根本的改変を要求するものではなく、従って関連する二、三の必要事項を加筆することで答申書が完成、昭和55年10月、理事会(たまたま藤井澄二君が会長、筆者も副会長の一人だった)に提出された。同理事会では、編修理事(注9)が中心となって検討を続け、いよいよ新便覧の出版方針を決定(昭和56年2月)、それを次期理事会へ引き継いだ。

7. 新便覧の本格的肉付けと出版

本会では従来から、機械工学便覧の出版分科会の主査は、前会長の中から選ばれる(3章参照)。そして今回もそれに従い、前会長・藤井澄二君を主査として新便覧の出版分科会が昭和56年度の初めごろに設置された。このことに関し5章に述べた経緯を振り返るとき、なにか神の摂理を感じないではいられない。

ともあれ藤井先生は、出版分科会の運営にあたり、以下のような方針をとっておられる。すなわち、(i) これまで検討、編修両分科会で得られた成果を生かすこと、(ii) できるだけ多数の人にとって利用価値があり、かつ寿命の長い便覧を作る努力をすること、(iii) 出版分科会の仕事は、規模が大きく、分科会委員から始まって所属小委員会委員、執筆者、その他、大勢の人々の献身的な努力によってでき上がるものゆえ、全体としての統一を計ると同時に、協力者の総意もできるだけ生かすように努めること——つまり全体として、こう決めたから、こうすべきであると決めつけしないで、いろいろの意見をも生かすことである。なお筆者は、藤井先生からの要請で、本分科会に幹事として参加した。

さて新便覧は形式上、従来の便覧の延長線上に位置するものであろうが、全面的な見直しのもと、すべてが新しく構成されるもので、その書名まで新しく決定されることになっていた。そのため執筆者の選考方針から始まり、執筆者のよるべき方針や注意事項を記す執筆要綱、執筆者から提出された原稿の査読要領(今回はすべて書下し原稿ゆえ査読が特に重要)、索引の作成方法、各編相互間の調整方法、その他、すべてが新しい問題を含んで新規に決定された。また、いろいろの細かい事柄でも、根本から検討して決めるべきものが少なくなかった。

そして藤井先生は、これらに対し非常に慎重に対処されたように思う。実際、重要な問題については、どれもこれも少なくとも3回の分科会の討議を経て、最終的に決定しておられる。そしてその結果、初めは予想もしなかった形の優れた方式になったものが多い。いま索引を例にとってみよう。これは国際化時代にも応じて、日本語および英語の両索引を備えるようにな

(注9) 一色尚次、大矢根守哉、佐藤 豪、島 隆、浜田実の諸君である。

(注8) 石原智男(前検討分科会主査)、田島清瀧(出版事業部会長)、棚沢一郎(前検討および現編修分科会幹事)、中沢 一(前出版事業部会長)、森 美郎(前検討分科会委員)、山川新二、油井兄朝(前検討分科会委員)の諸君および筆者で全体的検討小委員会が構成された。

っているが(注10)、新便覧では、ごくわずかの紙数を余分に使うだけで、日英どちら側の索引からも所定の箇所が明確に引けると同時に、辞書のごとく和英両用語間の対応も直ちにとれる方式に工夫されている(このため索引作成方法も通常方式とは異なる方法を採用している)。また便覧の表紙うらに付けてある単位の換算率表も、分科会の度重なる検討を経て改良されたもので、使いやすい形になっている。

一方、書名については、(i) 全体の名称、(ii) A, B, Cなどに大別された編の名称、(iii) 各分冊の名称と3種類の問題があり、かつそれぞれの名称が互いに関連を持ち合う。また当分の間は、従来の便覧と区別をつける必要もある。紙数の関係で以下には全体名称の問題だけに触れることにするが、これには各種の考えから14, 5種類にのぼる名称候補があった。そして、これらをいろいろの面から検討(途中アンケートも2回)した結果、本会会員にはすでに固有名詞になっていると言ってもいいほど伝統ある名称、つまり“機械工学便覧”の名前を今後も引続いて保持して行くことが決定された。そしてこれは全員もろ手をあげての決定であったことを付記しておこう。なお従来の便覧との区別のため、本に掛けるカバーに限り、適当な場所に“新版”の文字を入れてよいことになっているが、これは正式の名称ではない。

また今回の新便覧の出版で、大きな特色の一つに数えられるものにコンピュータ組版による製版がある。いろいろな形の量記号、複雑きわまる数式、多種多様な図と表、また脚注を含んだ原稿に対し、コンピュータ組版が奇麗にできあがること自体、筆者にとっては驚異であるが、これらはいつに学会事務局と凸版印刷の大きな努力によっている。もちろん新しい経験なので、まだ問題点も多少は残っているが、今後出版の経過中に改善されてゆくと思う。

なお分科会所属の各編集小委員会では、目次の最終決定(ある分野では、編修分科会答申の目次案に関し、特に使用者の便利の面から再検討を加え根本的改変を加えたところもある)、ページ数の内部割振り、執筆者選考(総数約620名)、執筆者との打合せ、提出原稿の査読、索引の検討など、苦勞の多い面倒な作業を遂行され、ずいぶんたいへんなことであったであろう。また執筆者各位はページ数制限(今回は初版にあたり将来の改訂のために余裕を残すべく特に制限を強くした)のなかで、わかりやすく、優れた原稿を作るべく大きな苦心を払っておられる。

8. 事務局の苦心

便覧の企画発行に際しては、従来も学会事務局の協力に大きく依存してきている。しかし今回は、便覧自体の基本構成が変わっていて、すべてが多数の執筆者

の書下し原稿であり、またコンピュータ組版の採用など新しいことづくめのため、事務局の仕事は非常にたいへんだったと思う。紙数の関係で、その詳細は書けないが、この機会に二、三を記して学会職員の方々(注11)に対する謝意に代えたいと思う。

用語や記号の統一のための指針は執筆要綱に定めてあるが、多数の執筆者に対し完全を期待することは問題であろう。しかも原稿の査読段階での統一修正も不可能のようで、結局ゲラ刷段階(時には索引用語のまとめ段階)での修正になりがちのようである。従って、これらの仕事は大半、事務局の世話になっている。

本会の便覧では、一つの編のなかで図、表、式、脚注の番号はみんな一連番号になっている。だから途中の原稿が、ごく一部欠けても編集出版の仕事はストップし遅延の大きな一因となる。一方、多数の分冊を順次発行する計画のもと、発行予定日目の遵守はたいせつなことである。しかし、ごく少数ではあるが、いくら督促しても、限りなく提出の遅れてゆくような原稿がないわけではなく事務局は発行予定日と板ばさみになって非常に苦勞している。

コンピュータ組版は便利であるが、やはり新しい経験なので問題もあったようである。たとえばコンピュータ出力や誤植訂正には、当初予想した以上に日時を要し、その穴うめに苦勞したようである。また刷上がりのページ面上に、文章、および関連する図、表、脚注をどのように割付けるか——その指示の仕方も、従来の活字組みの際の方式がだめなことが途中でわかり、組版作成者と細部の打合せや取決めをおこなって乗切るということもあった。また章と章をつなぐソフトにも問題が残っている。

9. む す び

以上、つたない筆の運びながら、新しい機械工学便覧の企画から誕生まで、過ぎし日々をいちおうたどってみた。思えばそれは、本会にとっても、決して短い歳月ではなかったし、また個人としては、それだけ確実に自分の人生が流れ去ったことであって、多少痛切な思いがしないでもない。

しかし個人的感傷は別とすべく、ただ、この長年月の間に投ぜられた数多くの人々の貴重な努力の結果、今ようやく新便覧が現実の姿をとり、しかも先行する改訂第6版(昭和50年刊行開始)に対し約9年というほぼ妥当な間隔で続くことになったのは、何と言っても感銘深いことである。

いま筆をおくにあたり、これまで直接間接関係されたすべての人々とともに、機械工学の今後の発展と、機械工学便覧の栄光を祈りたいと思う。

(原稿受付 昭和59年9月21日)

(注10) なお以前、昭和12年増補改訂版、および昭和26年(つまり改訂第2版、および改訂第3版のこと)は和英両索引を持っていた。

(注11) 野村邦彦(前編修課長)、高橋征生(現編修課長)、北氏政雄、またその他の職員の人々。